

川越町の子どもたちの学力向上に向けて

～全国学力・学習状況調査の結果報告 その①～

令和7年 9月
川越町教育委員会

本年4月、小学校6年生及び中学校3年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」の結果概要をお伝えします。川越町教育委員会では、結果からわかる、子どもたちの「強み」「弱み」等の傾向をとらえ、具体的な施策に反映していきます。つきましては、保護者の皆様には、家庭生活や生活習慣の見直しに向けてご協力をお願いいたします。

なお、この調査は学力の特定の一部を測るものであり、学力のすべてを測るものではないことをご理解ください。



1. 学力・学習状況調査結果

(1) 川越町小学校

□全体の傾向

国語

正答率は、全国値（全国平均正答率）を2.3ポイント下回っているが、正答数の中央値（※1）は全国値と同等となっている。これは多くの児童は全国並みであったが、正答率が高い児童数が少なく、低い児童が多いためである。

評価の観点（※2）別に見ると、「知識・技能」の項目は2.2ポイント、「思考・判断・表現」の項目は2.1ポイント、全国値を下回っている。

学習指導要領の内容（※3）別に見ると、知識・技能では「言葉の特徴や使い方に関する事項」が1.9ポイント全国を上回っているが、「情報の扱い方に関する事項」では5.6ポイント、「我が国の言語文化に関する事項」では7.0ポイント全国を下回った。また、思考力・判断力・表現力では「話すこと・聞くこと」で4.3ポイント、「読むこと」で2.5ポイント全国平均を下回り、弱さが見られる。

算数

正答率は、全国値を1.0ポイント上回っており、正答数の中央値（※1）は全国値と同程度となっている。これは、全国平均を大きく下回る児童は少ないが、全国平均をやや下回る児童が比較的多かったためである。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」は1.8ポイント上回り、「思考・判断・表現」は0.3ポイント全国値を下回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「測定」の領域で3.0ポイント全国値を下回っているが、「数と計算」「図形」「変化と関係」「データの活用」の4領域では、全国値と同程度か若干上回っており、改善が見られる。

理 科

正答率は、全国値から0.1ポイント下回っているが、正答数の中央値は全国値を0.5ポイント上回った。これは、全国平均よりも大きく下回る児童数が多いが、同時に全国平均を大きく上回る児童数も多いためである。よく理解している児童とそうでない児童の二極化が見られる。

学習指導要領の内容別に見ると、『粒子』を柱とする領域で3.9ポイント、『地球』を柱とする領域で3.8ポイント全国値を下回っているが、『エネルギー』を柱とする領域で0.3ポイント、『生命』を柱とする領域で6.7ポイント、全国値を上回っている。

※1 中央値

小さい数値（あるいは大きい数値）から順に並べたときに真ん中に来る数値

※2 評価の観点

学習指導要領において、児童生徒が学校教育の中で身につけるべき力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に対応した形で評価する際の3つの観点

- 「知識・技能」・・・各教科で身につけるべきとされている知識やスキル
- 「思考力・判断力・表現力」・・・課題や問題に向き合って解決していく力や友だちと協働しながら問題解決の糸口を見つけていく力、自らの思いを表現していく力
- 「主体的に学習に取り組む態度」・・・児童生徒自身がいかに学習を調整して、知識を習得するために試行錯誤しているか

※3 学習指導要領の内容

学習指導要領において、各教科に求められる内容。例えば小学校国語科であれば「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」など、小学校算数科であれば「数と計算」「図形」「変化と関係」などに分かれている。

□設問別結果から見える各教科における主な「強み」と「弱み」

	強みと弱み （強み・・・「◎」 弱み・・・「◇」）
国語	◎自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。 ◎自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 ◎全体的に無回答率が低い。 ◇話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることに課題がある。 ◇目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることに課題がある。 ◇情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことに課題がある。

算数	◎自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。 ◎コンパスを用いた作図の仕方を理解している。 ◎「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができる。 ◇台形の意味や性質についての理解に課題がある。 ◇基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述力に課題がある。 ◇比例の関係に着目し、求めたい数量の大きさを式や言葉を用いて記述する力の課題がある。
理科	◎電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いている。 ◎花のつくりや受粉についての知識が身に付いている。 ◎実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができる。 ◇水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明にすること課題がある。 ◇既存の知識を元に自然現象を論理的に表現することに課題がある。

(2) 川越町中学校

□全体の傾向

国語

全国の値（全国平均正答率）を2.7ポイント上回っており、正答数の中央値は全国と同等となっている。これは、全体的に全国平均を上回っている生徒数が多いためである。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目、「思考・判断・表現」の項目ともに2.9ポイント、全国の値を上回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「知識・技能」では「言葉に関する事項」のみの出題となっており、2.9ポイント全国の値を上回っている。「思考・判断・表現」では「話すこと・聞くこと」で1.0ポイント全国の値を下回ったが、「書くこと」で6.4ポイント、「読むこと」2.3ポイント全国を上回っている。

数学

全国の値を3.7ポイント上回っており、正答数の中央値も1.0ポイント上回った。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は2.8ポイント、「思考・判断・表現」の項目は5.2ポイント、全国の値を上回っている。これは、全体的に全国平均を上回っている生徒数が多いためである。

学習指導要領の内容別に見ると、4領域すべてにおいて全国の値を上回ったが、特に「図形」の領域で7.3ポイント全国の値を上回っている。

理科

全国の値を 1.0 ポイント上回っており、平均 IRT（※4）スコアも全国を 4 ポイント上回っている。IRT バンド（※5）分布から、低位層の割合が低く、中間層と高位層の割合が高くなっていることが分かる。これは

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は 1.8 ポイント、「思考・判断・表現」の項目は 0.3 ポイント、全国の値を上回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、『エネルギー』を柱とする領域で 1.0 ポイント下回ったが、『粒子』を柱とする領域、『生命』を柱とする領域、『地球』を柱とする領域の 3 領域については全国の値を若干上回った。

※4 IRT（Item Response Theory：項目反応理論）

国際的な学力調査（PISA、TIMSS など）や英語資格・検定試験（TOEIC・TOEFL など）で採用されているテスト理論。児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができる。

IRT スコアは IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すもの。

※5 IRT バンド

IRT スコアを 1～5 の 5 段階に区切ったもの。3 を基準のバンドとし、5 が最も高いバンドとなる。

□設問別結果から見える各教科における主な「強み」と「弱み」

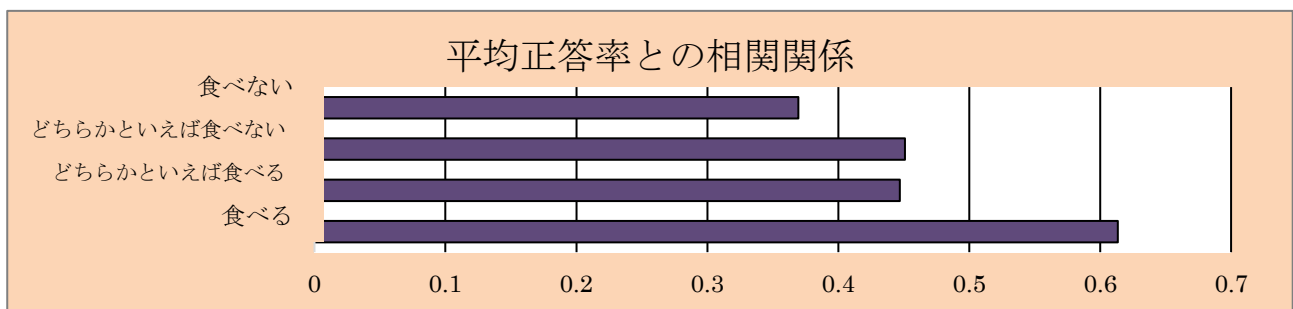
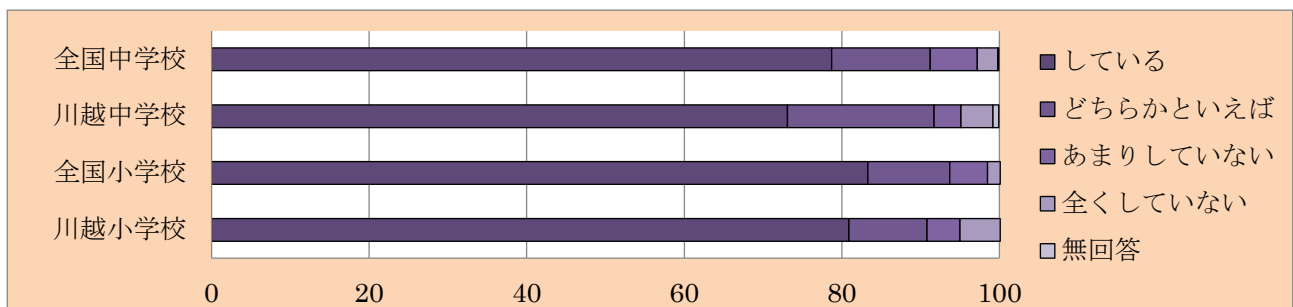
	強みと弱み（強み・・・「◎」 弱み・・・「◇」）
国語	◎自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができる。 ◎漢字の理解。 ◎読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができる。 ◎表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。 ◇相手の反応を踏まえながら自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く力に課題がある。
数学	◎数量を文字を用いた式で表すことができる。 ◎多角形の外角の意味を理解している。 ◎相対度数の意味を理解している。 ◎事象を数学的に解釈し、関数を使って問題解決の方法を数学的に説明することができる。 ◎ある事柄が成り立つことを、構想に基づいて証明することができる。（図形の証明） ◇素数の意味を理解している生徒の割合が低い。（「1」を素数と考える生徒の割合が高い。）

理科	◎生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いている。
	◎元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いている。
	◎化学変化の分解の知識が概念として身に付いている。
	◇回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能に課題がある。
	◇状況共通性と多様性の見方を働かせながら比較し、多面的、総合的に分析して解釈することに課題がある。

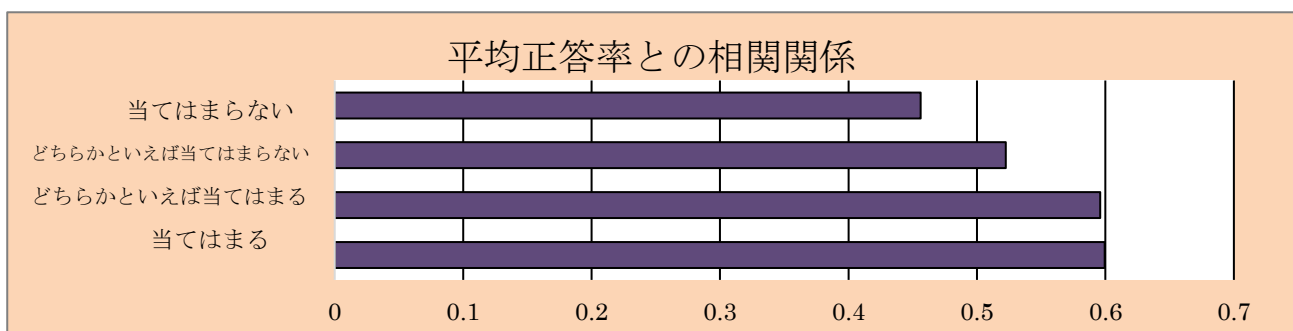
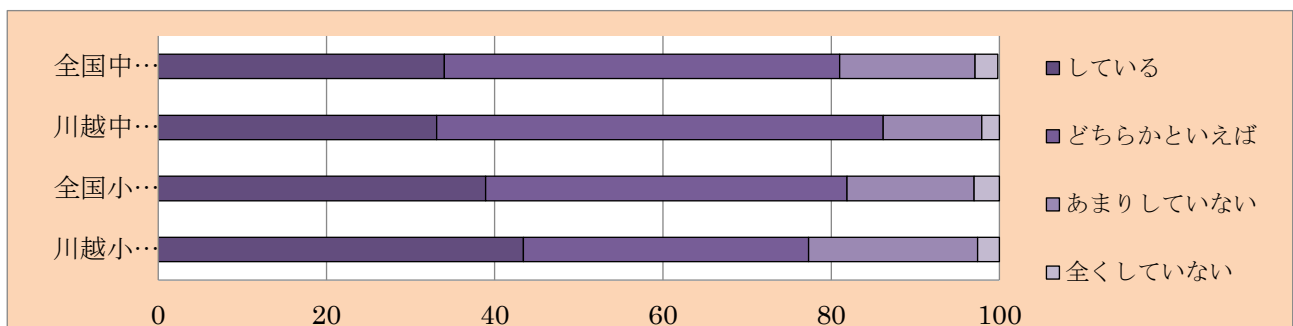
(3) 児童生徒質問紙による生活調査結果

① 基本的な生活習慣

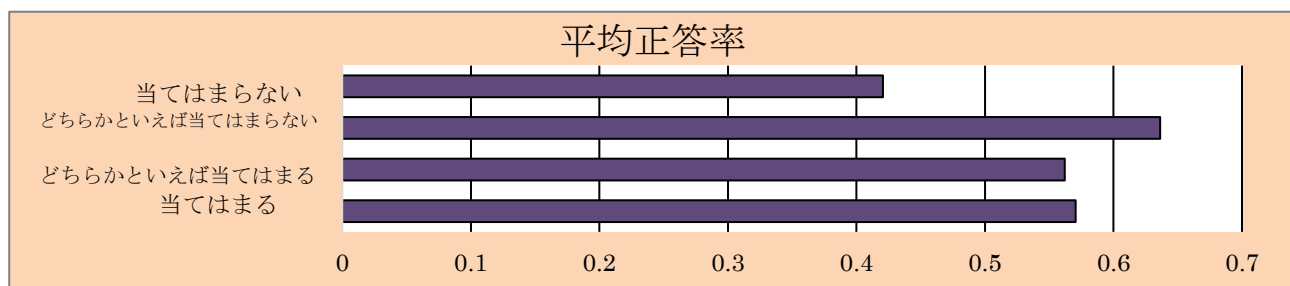
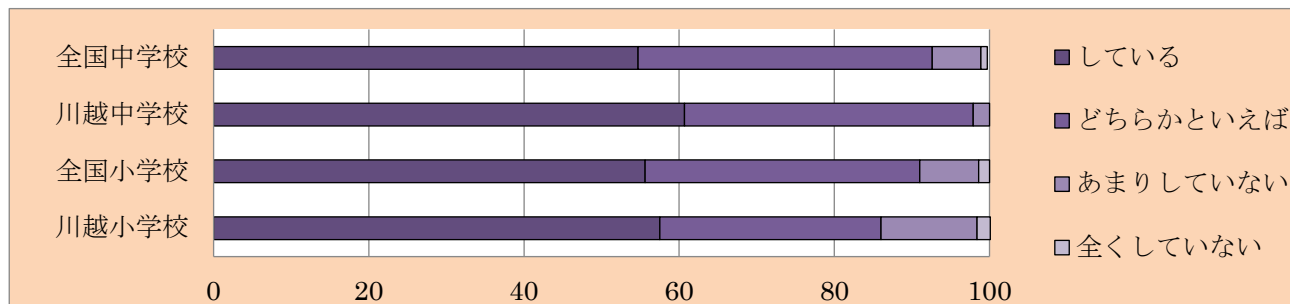
Q：朝食を毎日食べていますか。



Q：毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。



Q：毎日、同じくらいの時刻に起きていますか。



＊ 就寝時刻と起床時刻は小学校で「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した割合は全国よりも 4.6 ポイント下回っている。中学校においては全国を 5.2 ポイント上回っている。

朝食の喫食率は、中学校では全国と同程度であるが、小学校では全国よりも 3.0 ポイント低く、「食べない」と回答している児童も 5%程度おり、全国のおよそ 3 倍となっている。

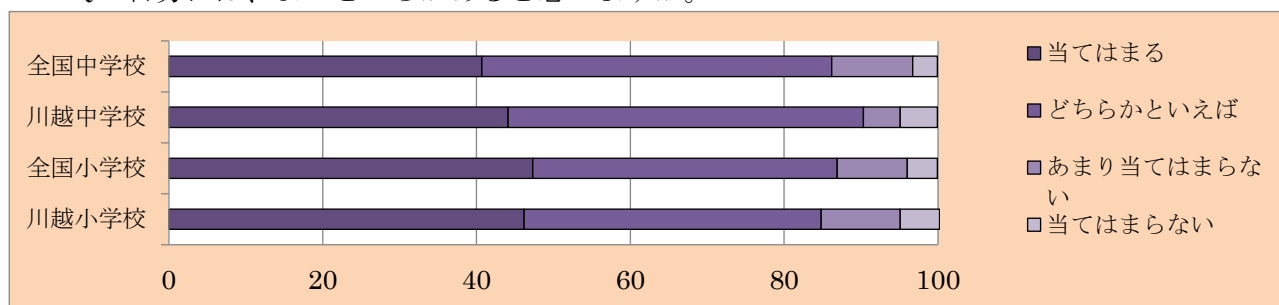
基本的生活習慣は、小学校において改善の必要性が感じられる。

朝食の喫食や起床時刻・就寝時刻と正答率のクロス集計を見ると、規則正しい生活をしている児童生徒の正答率が最も良く、「どちらかといえば当てはまる」「どちらかという当てはまらない」「当てはまらない」と下がっていく傾向が見られる。起床時刻と正答率の相関関係のグラフでは「どちらかという当てはまらない（同じ時間に起きない）」の正答率が 63.6%となっているが、調査対象者 246 人中、15 人と母数が小さく数値の信頼性は高くないと考えられる。

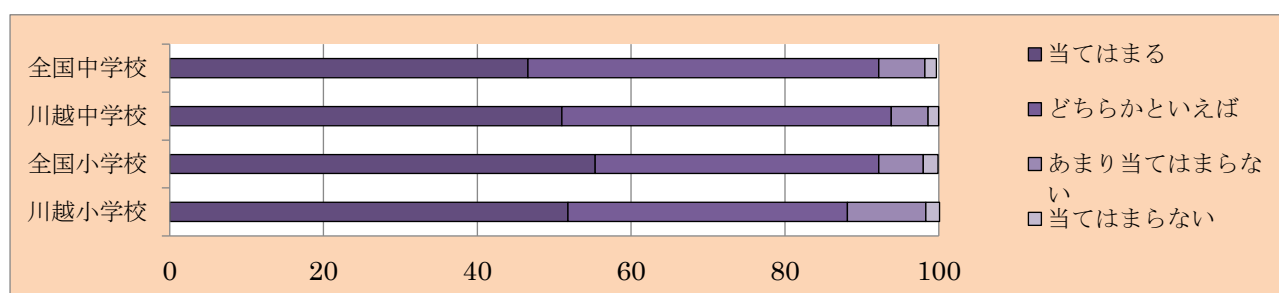
「早寝・早起き・朝ごはん」を心がけ、規則正しい生活リズムを整えることが大切である。

② 自己肯定感

Q：自分には、よいところがあると思いますか。



Q：先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。



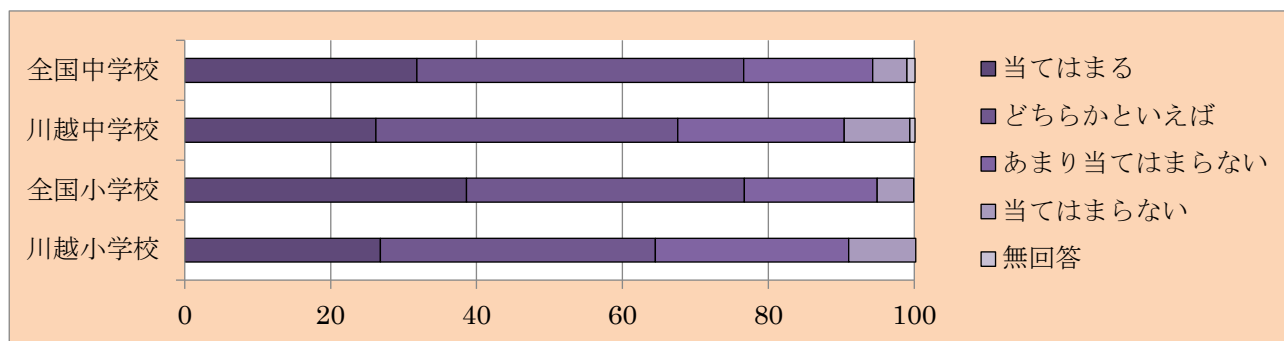
＊ 「自分には、よいところがあると思うか」の質問に対し、肯定的な回答は小学校では2.2ポイント下回った。中学校では肯定的な回答の割合は4.1ポイント全国を上回っている。昨年度と比較すると、小学校も中学校も肯定的に回答する児童生徒の割合は高くなっている。

「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思うか」の質問での肯定的な回答は、小中学校のどちらとも全国の割合と同程度であった。小中学校ともに9割近くの児童生徒が「先生は自分のよいところを認めてくれている」と感じており、非常に高い結果となっている。教師の配慮等を感じることができる。ただ、約1割の児童生徒は認められていないと感じていることから、教師の声かけが届いていない、もしくは児童生徒が認めてほしいところと教師が認めているところが一致していないことが考えられる。

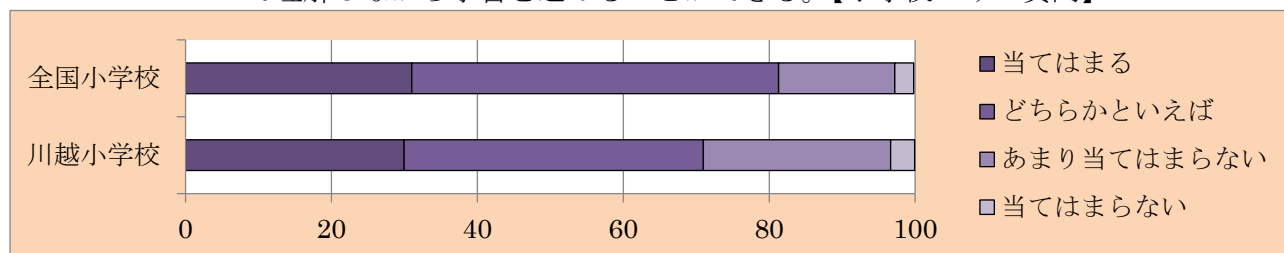
本町では「豊かな心」を培うため、非認知能力を高めることや自己肯定感・自己有用感を育み、相手の個性を尊重することを大切にしているところである。今後はこの結果を踏まえ「豊かな心」を培うための自己肯定感・自己有用感を育むことができるよう、より一層、町の教育基本方針の共通認識を図っていく。

③ ICT 機器の操作に関わること

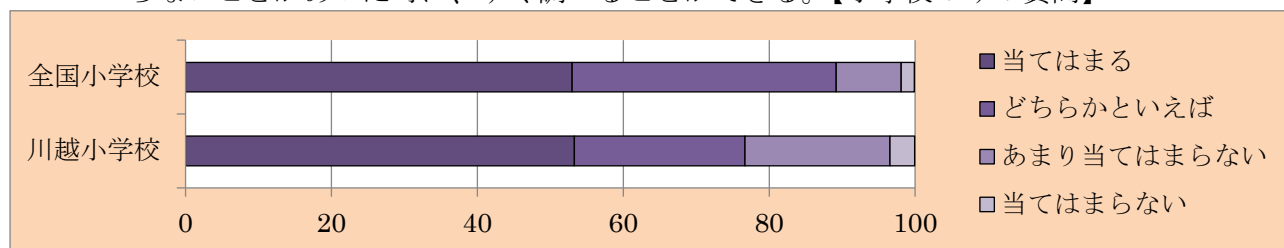
Q：あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができますか。



Q：5年生までの学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、自分のペースで理解しながら学習を進めることができる。【小学校のみの質問】



Q：5年生までの学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、分からないことがあった時に、すぐ調べることができる。【小学校のみの質問】

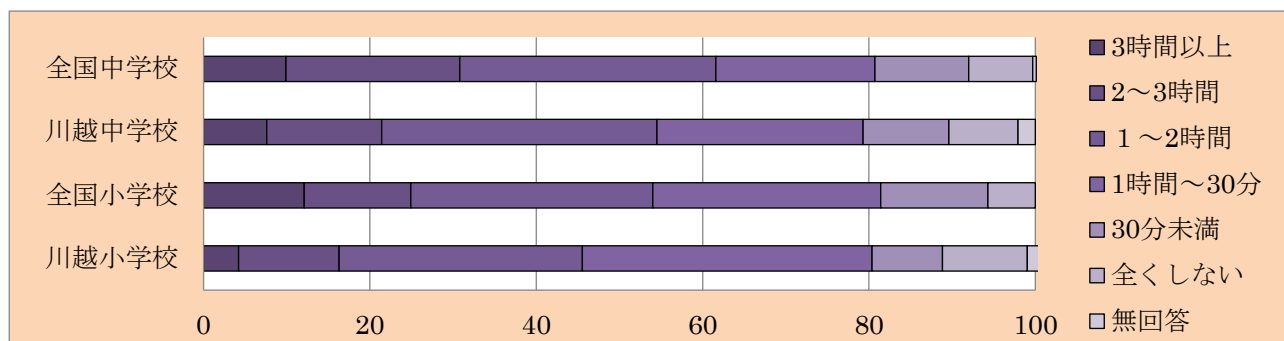


＊ 「ICT機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができるか」の質問に対し、中学校では肯定的な回答が全国を9.0ポイント下回り、小学校においては肯定的な回答が全国を12.2ポイント下回っている。また、小学校において授業での個に応じたICTの活用については、全国を10ポイント以上下回る結果となった。

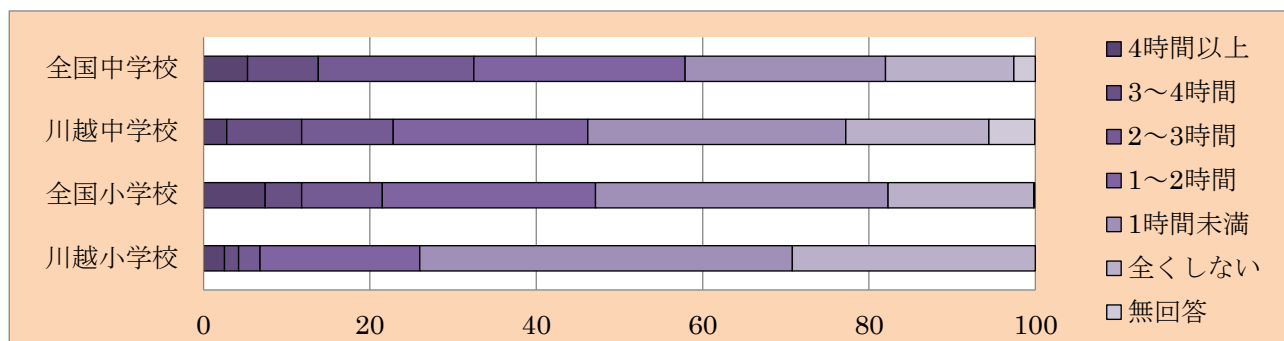
学校現場では、ICT 機器を活用した授業を推進しているが、児童生徒は「できる」と自信をもって答えられるまでには達していないことが分かる。これからは ICT 機器を活用することは基礎的なスキルとして求められるため、更に活用を推進していく必要がある。

④ 学習習慣

Q：学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾や家庭教師、インターネットで学ぶ学習も含む）



Q：土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾や家庭教師、インターネットで学ぶ学習も含む）



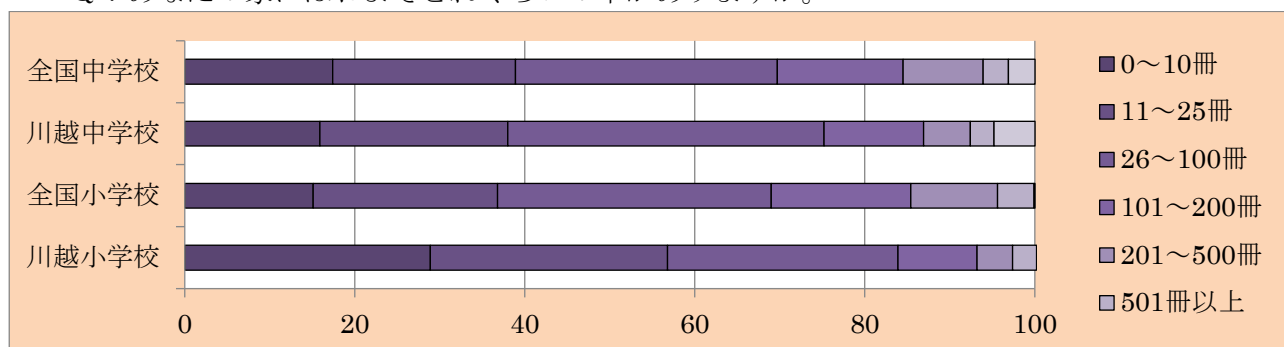
* 平日に1日当たり1時間以上学習すると回答する割合は、小学校では 45.6%で全国を 8.6 ポイント、中学校においては 54.5%で全国を 7.1 ポイント下回っている。

また、学校が休みの日に1日当たり1時間以上学習すると回答した割合は、小学校では 26%で全国を 21.1 ポイント、中学校では 46.2%で全国を 11.7 ポイント下回る結果となった。

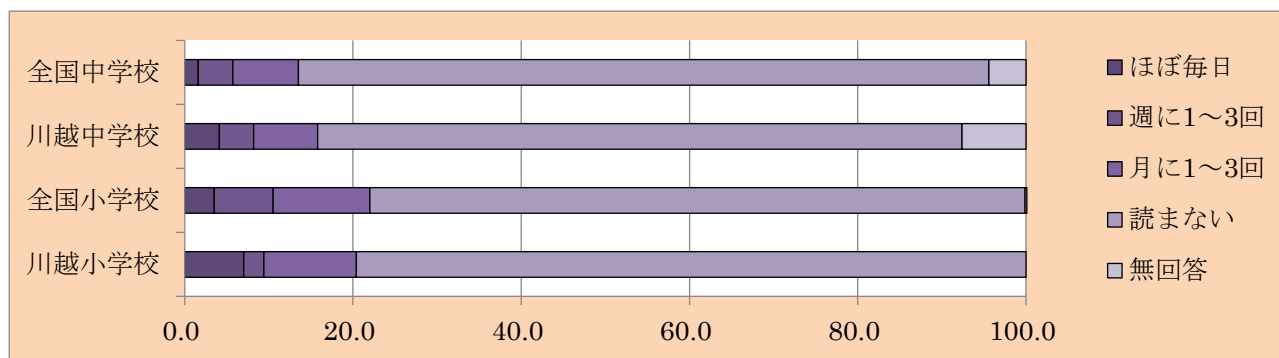
この結果から、本町の子どもたちは全国に比べて、家庭での学習時間が少ないことが分かった。学校で出される全員に共通した宿題だけでなく、自らの疑問や関心から学びたいことを学ぶ時間をしっかりと確保できるようにしたい。

⑤ 読書習慣

Q：あなたの家にはおよそどれくらいの本がありますか。



Q：新聞を読んでいますか。



＊ 100 冊以上家に本がある割合は小学校で 16.2%で全国を 14.7 ポイント下回り、中学校では 20.0%で 7.2 ポイント全国を下回った。また、25 冊以下と回答した割合は小学校で 56.8%で全国を 20.0 ポイント上回り、中学校では 38.0%で全国 0.9 ポイント上回っている。

全国と比較し、本町の小中学生の家庭にある本の冊数は少ない傾向があることが分かる。

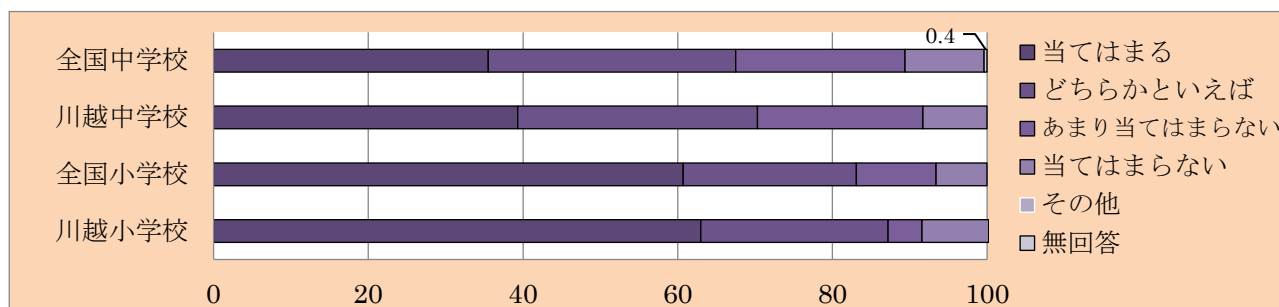
また、「新聞を読まない」と回答した割合は小学校で全国を 1.7 ポイント上回り、「毎日読む」と回答した割合は全国を 3.5 ポイント上回った。中学校では「新聞を読まない」と回答した割合は全国を 5.5 ポイント下回り、「毎日読む」と回答した割合は全国を 2.5 ポイント上回った。

小学校では、新聞を読む児童と読まない児童の二極化が見られ、中学校では読む生徒が全国と比べても多いことが分かる。

引き続き、授業以外の場面で児童生徒の読書活動推進に向けて、学校図書館の効果的な利用法や家庭読書推進の啓発に向けての取組を検討していく必要がある。

⑥ キャリアの形成

Q：将来の夢や目標を持っていますか。



＊ 「将来の夢や目標を持っているか」の質問に対し、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、小中学校ともに全国を上回っている。

本町では、豊かな心を育む取組の一つとして、「夢を持つことの素晴らしさ」、「仲間と協力することや、助け合うことの重要性」などを子どもたち感じてもらうため、スポーツ界で活躍した選手等を招聘していることが、今回の結果につながる要因の一つと考えられる。

(4) 学校質問紙の結果からみえる児童生徒の姿

① 言語活動の充実と自分の考えを深め、表現する力を育成する取り組み

新たな学習指導要領に沿った教育活動が行われるようになり、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めることや児童生徒の発達の段階を考慮して、児童生徒の言語活動など学習の基盤をつくる活動を充実することが求められている。「言語活動について、国語科を要としつつ、各教科の特質に応じて学校全体として取り組んでいますか」の問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。このことから、本町内のすべての学校において、児童生徒の学習の基盤をつくる活動として国語科のみではなく、あらゆる教科等で言語活動に取り組んでいることが分かる。「話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていますか」という問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。このことから、各校で教師が学習指導要領に示された児童生徒につけるべき力を意識したうえで、言語活動を取り入れた主体的な学びを実現するための授業構成を考え、実践していることが分かる。

② 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

「それぞれのよさを生かしながら、他者と情報交換して話し合ったり、異なる視点から考えたり、協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫しましたか」「授業において、児童自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか」という問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。学校は学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業実践を行っていることが伺える。一方で、児童生徒質問紙にある「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」という問いに対して、小学校では肯定的な回答が全国を2.0ポイント下回る結果となり、教師と児童の感覚に乖離があることが分かる。同じ質問に対し中学校では肯定的に回答する生徒が全国を6.4ポイント上回っており、今回の調査結果の良さにも結び付いていることが伺える。

③ 自己肯定感・自己有用感の育成（自尊感情）

学校質問紙において「学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法等を合意形成できるような指導を行っていますか」の質問に対し、すべての学校で肯定的に回答している。自己肯定感・自己有用感を高めるためには「自分が人や学級のために力になることができています」と感じる事が重要である。互いの意見のよさを生かして解決方法等を合意形成できるような指導は、そのように感じられる機会を確保することにつながっていると考えられる。また、前述したように児童生徒質問紙において「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒は、9割近くと高くなっている。教師が学校教育活動の様々な場面で児童生徒の姿を見取り、「認め」「褒め」「励ます」といったことを意識的に行っていることが伺え、児童生徒の個性を大切にしながら、豊かな心の育成に取り組んでいることが分かる。そして、児童生徒も教師が自分たちのことを見てくれているという思いを持っていることが分かる。

しかし、学校教育活動の中だけでは自己肯定感・自己有用感を育むことは難しく、家庭や地域とともに育んでいくことが重要である。一人ひとりのよい点や可能性を見つけ、よいタイミングで評価や承認を行うことが自己肯定感・自己有用感の育成につながる。今後も家庭・地域・学校が一体となって児童生徒を見守りながら、成長の後押しをしていきたいと考えている。

2. 学力・学習状況調査結果の「弱み」を改善するための対策



全体を通して

全教科において、教科特有の「見方・考え方」、つきたい力を明確にし、「何を学ぶか」という必要な指導内容だけでなく、「何ができるようになるか」を重視し、そのために「どのように学ぶか」という学習過程を大切にしたい授業改善を進める。

1. 「めあての提示と振り返る活動」(目標の提示、振り返り活動)のある授業の徹底を図り、子どもたちが一時間の授業の見通しを持ち、授業の中で「できた・わかった」と実感が持てる学習へつなげる。
2. 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を行う。
3. ICT 機器の効果的な活用を探り、授業改善を行う。
4. 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く力をつけるための指導を行う。
5. 一人ひとりの学習状況を十分とらえ、少人数による効果的な指導を行う。

国語

1. 基礎的な力をつける時間の確保
 - ・ていねいに指導できる時間の確保と家庭学習の充実を図り、基礎基本の定着に向けた取り組みを進め、学力の底上げを図る。
2. 書くことの指導の充実
 - ・書く活動において、児童生徒の興味関心に応じた題材を設定し、子どもたち自らが書くとする気持ちを高める手立てを講じ、児童生徒が主体的に取り組めるように工夫する。
 - ・発達段階に応じて「字数制限やテーマなどの条件を与えて書く活動」を、授業の中に継続的に取り入れていく。(国語に限らず他教科においても「条件を与えて書く」活動を行っていく。)
 - ・自分の考えを文章として書く際には、自分の考えの根拠となることを明らかにしながら書く活動を取り入れていく。
3. 読む力を育成する指導の充実
 - ・説明文においては、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけられるような指導を行えるようにしていく。
 - ・いろいろな文章や作品に出会わせるために、読み聞かせの機会を充実したり、選書コーナーを設置したりするなど、各校において読書活動や学校図書館での活動を工夫する。
4. 自分の考えをまとめる活動の充実
 - ・授業における話し合いや毎時間のめあてに対するふりかえりの中で、自分の考えをまとめる活動を取り入れる。発達段階や内容に応じて、字数制限やキーワードを提示するなどの条件を与えて書かせるようにする。
 - ・自分の考えをまとめたものを友だちと共有する活動を取り入れ、自分の考えと比較し、新たな考えを知りながら、考えを深めていく活動を取り入れる。その手立てとして ICT 機器の効果的な活用を進めていく。
 - ・自らの問題解決に必要な資料や情報を選択・活用し、友だちと互いに意見を出し合って自分なりの考えをまとめる活動を取り入れる。さらに、まとめたものを発表する活動につなげていく。
 - ・小学校では「話すこと」に課題が見られるため、スピーチや自分の考えを伝える活動、整理して書いた文章を友達の前で読む活動等を積極的に取り入れることで「話す力」の向上と「自信を持たせること」につなげていく。

算 数・数 学

1. 基礎的な力をつける時間の確保

- ・基礎となる内容の定着のために、ていねいに指導できる時間の確保と家庭学習の充実を図り、定着に向けた取り組みを進める。

2. わかる授業を目指した授業展開の工夫

- ・子どもたちの生活に沿った身近な課題を見出し、児童生徒が主体的に取り組める授業を展開していく。また、算数・数学の時間に学習したことを日常生活の中で活用できるように工夫する。
- ・既習事項をもとにした応用問題等に取り組ませ、子どもたちが学び合う中で、その解決方法を見い出せるような学習活動を取り入れる。
- ・言葉や数・式と、図・表・グラフなどを関連付けて考える授業を取り入れる。
- ・「ふりかえり」の時間を大切にするとともに、子どもたちの理解度を測る評価問題などを適切に取り入れる。
- ・個々の子どもたちの強み・弱みを把握し、少人数による学習活動を進める。

3. 自分の考え方や求め方を説明する

- ・算数・数学用語、数学的な表現を用いて「◎◎であるから、△△である。」の形式で記述させたり発表させたりする。
- ・ICT 機器を効果的に活用し、個々の児童生徒の考え方や求め方を交流したり、自分の考え方をまとめたりする。

理 科



1. 生活科から始まる「遊び」「体験」活動の充実

- ・日常生活や身近なことから、価値や疑問を見出し、自分で調べたり考えたりする活動を繰り返し行い探求意欲を高める。

2. 実体験を伴う観察・実験の充実

- ・生物や実験器具等を見たり、触れたりして本物を知る。また、観察・実験の充実を図り、教科書からだけでなく、体験を通して知識・技能を高めていく。さらに、観察・実験をするだけでなく、予想や仮説を設定し、観察・実験後に検証する。また、その結果からさらに考え合う活動を設定する。仲間の考えを聞き、自分の考えをより妥当な考えに改善するための時間を確保する。

3. 学習を通して得た知識を日常生活等に当てはめて考える（活用）活動の充実

- ・日常にある当たり前のことを、理科の知識で説明できるようにする。
- ・身近に始まり、身近で終わる授業展開を工夫する。

4. 複数の情報を関連付けながら、分析・考察させる活動の充実

- ・複数の情報を比較させ、共通点や相違点を見つける場面を設定する。

3. 町教育委員会による手立て

(1) 少人数教育の充実

少人数での指導体制を継続し、国語科および算数・数学科を中心とした基礎的・基本的な力の向上を目指します。

(2) きめ細やかな指導体制の充実

町非常勤講師や学習支援員及びA L Tの配置を生かした指導のあり方をさらに充実し、一人ひとりの子どもたちが学びやすい環境づくりを進めます。

(3) 学力向上推進担当者会の開催

川越町学力向上推進担当者会において、各校の学力向上に向けた取組やその成果・課題等に

ついて協議・情報交流を行い、子どもたちの学ぶ力を伸ばすための授業改善を進めます。また、川越町全体で進める学力向上策について検討します。

（４）校内研修等への訪問指導・支援

北勢教育支援事務所および町教育委員会の指導主事、学力向上アドバイザーが各校へ訪問し、学力向上に向けた校内研修への指導・支援を進めます。また、学力の定着を図るための授業のあり方について、教職員に向けた継続的な直接指導を進めます。

（５）ICT 機器を効果的に活用した授業の推進

ICT 機器を活用して、教師と児童生徒、児童生徒同士が意見や考え方を交流しあう場面を作り上げ、主体的・対話的な授業の実現を目指します。また、ICT 機器の研修会等の校内研修への指導・支援を進めます。

（６）家庭学習習慣及び読書活動の推進

各家庭でのスマートフォンやTVの視聴、ゲームをする時間等を振り返り、各校が配付している家庭学習の手引きやシラバス（授業計画）をもとに、家庭学習の定着に向けた取組を進めていきます。また、「読書旅行」や「家庭読書の日」の取り組みを推進し、小学校低学年から本に触れ合う機会を増やし、語彙量（ごいりょう）を増やしていきます。

『豊かな心』を土台とした社会で生きていく力の育成

2022年4月に改定しました川越町教育基本方針で示した通り、川越町は【『豊かな心』を土台とした社会で生きていく力の育成】を基本方針としています。

『豊かな心』を培うために必要なこと（3つ）、
「非認知能力を高めること」
「個性を大切にすること」
「相手の個性を尊重すること」を大切にし、教育活動を行います。

